

1. 主題 自然とかかわる活動や体験を通して、自然の不思議さや面白さを実感する  
『グリーンカーテンプロジェクト』

2. レポートの要点

自分たちの生活を見つめ直し、環境学習を通して、自ら考え実践できる生徒を育む取り組み

3. 目標 ①自分と身近な植物との関わりに関心を持ち、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。  
②自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それらを通して気付いたことや楽しかったことなどを言葉、絵、動作、劇化などにより表現できるようにする。  
③具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

4. 概要 昨年度、特別支援学級の理科を週2時間担当することになった。支援学級での理科は週3時間を二人の教員で担当した。

4月に授業で理科室に行った時、3年生の生徒の一人が「初めて理科室に来た」と喜びの声をあげた。正直、まさかと思ったため、後日、当時の担当者に聞いたところ「そんなことはないです。何度か授業で使用しています」とのことだった。

これは何を意味しているのかを考えたところ、やはり授業での実体験が記憶に残らないものだったのではないかと感じた。

平成24年に開かれた初等中等教育分科会での、特別支援教育の在り方に関する特別委員会で、『障害のある子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備』という報告を見つけた。

○「合理的配慮」とは、「障害のある子どもが、他の子どもと平等に「教育を受ける権利」を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適当な変更・調整を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて、学校教育を受ける場合に個別に必要とされるもの」であり、「学校の設置者及び学校に対して、体制面、財政面において、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」、と定義した。なお、障害者の権利に関する条約において、「合理的配慮」の否定は、障害を理由とする差別に含まれるとされていることに留意する必要がある。

「合理的配慮」の考え方については、特別な支援が必要な子どもの中には、必要かつ適当な変更・調整を行わなければ、授業が分からない、学習活動に参加している実感が持てない子どもが見られ、そのような場合に必要とされると考える。

授業のユニバーサルデザインにより、特別な支援が必要な子どもに焦点を当て、その子どもを包括できる授業を構成し、指導目標を焦点化したり、視覚化により見通しが持てたりするなどの必要に応じた個別の配慮をすることも、「合理的配慮」かと考えた。

支援学級での理科では、今までの学習してきたであろう内容の記憶の断片を探りながら授業を展開しつつ、理科教育・環境教育での感動を大切に、今後通級での授業への意欲を持てるようにしたいと考えた。

昨年度は、植物の栽培を通して、その生長に対する喜びや感動、命の尊さなどの体験することができた。

緑のカーテンとして、ゴーヤを栽培することにした。これらの植物は様々な恵みをもたらし、子どもたちの興味関心を高めることができた。

しかし、植物を栽培していく授業では、うまく成長せず途中で枯れてしまったりしては残念な気持ちしか残らない。何冊か栽培書なども読んだが、やはり専門科の指導を受けるのが一番と考えた。

今回、JAグリーン津店より山下和仁さんを講師にお招きし、種まきや苗の植え付け、肥料の与え方などの指導を受けた。

事前に、担当教師も、適当なプランターの大きさや、栽培に適した場所の選定なども丁寧に指導していただいたうえで、子どもたちに出前授業の形式で実施した。

週3回の授業において、スケッチや手入れなどを行い、また模造紙へ成長の様子をまとめた。それらを『つ・環境フェスタ』への出展し発表することで、環境学習への高まりもみられた。









## 5. 本年度の取り組み

ゴーヤを育てていくうちに、日々成長する植物のたくましさや緑の葉の美しさなどに感動する体験は持たせることができたと考える。また、生命の不思議や尊大さ、命の大切など情操の部分にも触れることができた。壁新聞形式にまとめ、文化祭では作品展示をすることができた。

しかし、特別支援学級の時間割の編成上、同じ進度で授業を展開することが大変難しい。また、本年度は私自身が支援学級の教科の担当時間がなかったため特別授業として環境学習をさせてもらい、昨年度の学校での体験をもとに授業を展開した。

昨年度は植え付けの時期がやや遅かったためか、緑のカーテンに成長する時期が夏休み期間中になってしまい、緑のカーテンのもたらす環境への影響についての学習をすることができなかった。地球温暖化やヒートアイランド化などの環境教育への発展を考えた。



中学校1年理科での植物の単元では蒸散作用を学習するが、二人ともその学習はしていないため、カーテンの役割（熱の出入りをささぎったる、光度の調節など）を話しながら、植物の葉でカーテンにする意味について、様々な日常の体験（打ち水やミスト等）を踏まえて、温度に目を向けられるように指導した。

## 6. 来年度に向けて

栽培場所が支援学級の教室から離れた場所であり、支援教室での環境の変化を実感することもできなかった。来年度は、年度初めからスタートして、室温の測定なども含めた調べ学習をしていきたいと考える。また、担当者と打ち合わせし、継続して緑のカーテン作りに取り組むようにカリキュラムの中に位置づけていきたいと考える。

【参考文献】 1) 文部科学省, 2012年, 中学校学習指導要領解説「理科」

2) 放射線等に関する副読本作成委員会, 2011年, 『知ることから始めよう 放射線のいろいろ』

3) 特別支援教育の在り方に関する特別委員会(第14回), 2011年, 特別支援教育の在り方に関する特別委員会及び合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループにおける意見の概要(資料3-1)

4) 初等中等教育分科会(第80回), 2012年, 障害のある子どもが十分に教育を受けられるための合理的配慮及びその基礎となる環境整備(資料1)

5) NPO法人緑のカーテン応援団, 2011年, 『育てて楽しむはじめての緑のカーテン』, 家の光協会

6) NHK出版編集, 2014年, 『趣味の園芸 イラストでわかりやすい緑のカーテンの育て方』, NHK出版

7) 菊本るり子, 2012年, 『みどりのカーテンをつくろう』, あかね書房

8) サカタのタネ「緑のカーテン」普及チーム, 2013年, 『花も実もある よくばり! 緑のカーテン』, 農村漁村文化協会